

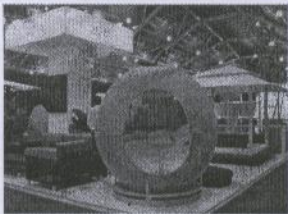
インドネシアの製品が向上し、素材が多様化してきた、その原因はなんだろうか。

カリム氏はまず「アスミンダのメンバーは樹脂、金属、籐、木材を家具に使用するだけでなく、新しいデザインとデザインを追求、ライフスタイルを追求、ライフスタイルを追求している。イタリア始め海外のデザイナーが指導に入り、従来と違った産業形態を目指してきた。そのためには籐、金属、木材の複合材を使用すると同時に、国内メーカーのコラボレーションにも取り組んできた。」

「アスミンダの参加者は毎年海外への出展で、新しいデザインを見てきた。メッセ・フランクフルトのインテリア・ライフスタイルショーにも今年六月に参加する。また従業員一人当たり月に中国が千二百元から三千元(一万八千円から三万円)だが、インドネシアは百元(約一万二千円)で賃金は安い」



林作新氏(左側)とカリム氏①出展された奇抜なデザインの家具



アメリカやイギリス、オーストラリアなどへ工作しているという。いずれにしてもインドネシアをはじめアセアン、アジアの家具時代だ。(続く 長尾)

インドネシア家具が ライフスタイル型に 国内向け出荷額は3億ドル

ここで、ホーム&ホームの林作新氏が「中国よりもインドネシアの方が有利だ。中国の企業は民間化し、厳しい事業環境に耐えている」と口を添えて。対してカリム氏はインドネシアもビジネスは大変だ」と語ったが、その背景に木材の輸入税の存在などがあるようだ。

インドネシアの家具産業は企業数約二千、国内向け出荷額三億(約三百六十億円)の五年間、年率で七%の伸びを示しているという。「しかし、ベトナムがい、政府のサポートが違」とカリム氏は語る。今度は林氏と中国家具協会の話になった。二〇〇七年王明亮氏(IAFPのメンバーで筆者の友人、前中国家具協会常务理事)と林作新氏が協会の副会長になったという。会長は賈清文氏。びっくりして新執行部の話になったら、なんでも中国の地方の家具協会の数だけ副会長が居るという。流石に大中国というか、それだけ組織統治の幅を必要にする事情を抱えているのか、と妙に納得した。

そして、スペインのマヨルカ島でやった世界家具会議のなどを北京で開催すべく計画を立てているという。五輪を控えているの絶対のイベントかも知れない。日本にも近い。筆者も記者として参加できると林氏には促進を促した。

国際
インターナショナルクロス